

平等院改修の歴史と、景観づくりに関する話

平等院の歴史は修理の歴史とも言われているように、これまでの歴史の中で度々改修作業をすすめ、その積み重ねがいまの平等院を形作っている。平等院は藤原頼道により永承7年（1052）に開創され、非常に優美で華やかな極楽浄土の世界を表現した阿弥陀堂（鳳凰堂）と阿弥陀如来像は浄土信仰を社会に広めてくこととなった。境内も現在の平等院の範囲よりも大きかった。

しかし、建武3年（1336年）に足利尊氏の率いる軍と戦った楠木正成が平等院周辺に放火し、伽藍の阿弥陀堂は残るものの、広大な境内の中にあつた多くの塔やお堂が消失してしまう。平等院の修復の歴史はここから徐々に始まっていった。明応年間である1492年から1501年までの間に、平等院の修復のため浄土院が開設された。1640年には羅漢堂が建設され、1654年には最勝院も開設された。寛文10年（1670年）には阿弥陀堂の大規模な修復が行われた。このころから、平等院の護持（管轄）は浄土宗の浄土院と、天台宗の最勝院の両宗が行いようになったという。

元禄11年（1698）年には宇治大火によって寺の荒廃も進み、阿弥陀堂の壁にある優雅な壁画も落書きが描かれるほどであった。そこで明治時代(1868–1912)になると再び修理と保全の動きが始まっていく。阿弥陀堂の明治修理によって重要な雲中供養菩薩像も修復され、昭和(1926–1989)にも大修理が行われた。信仰と修復の歴史によって、鳳凰堂と阿弥陀如来坐像に続き、梵鐘、雲中供養菩薩像、天蓋、鳳凰堂中堂壁扉画などが次々に国宝に指定された。修復の過程で、装飾品の製造において精巧な技術が用いられてきたことがわかってきた。また阿弥陀堂前の池での発掘調査では江戸時代の地層から見つかった一粒の種から貴重な「平等院蓮」が発芽した。2001年にはミュージアム鳳翔館も開館した。寺院の周辺は都市開発も同時に進んでいるが、鳳凰堂を拝観する際に、その極楽浄土の世界観を十分に味わうために景観には最新の注意が払われている。阿弥陀堂を正面から拝む際、ミュージアムの建物はおろか、背景にビルなどが入り込むことはない。現在も、平安時代に表現された極楽浄土の美しさと人々が積み重ねた信仰の厚みを実感することができる。